

子どもを対象にした川での自然体験活動についての検討

宮崎大学 学生会員 ○菅 慎一郎

宮崎大学 正会員 杉尾 哲

1. はじめに

河川の水質悪化、工事や河川改良による河岸構造の変化などにより、河川の生態系は貧弱化するとともに川は危険な場所として認識されるようになった¹⁾。このような中、最近の環境問題への関心の高まりを受け、河川は身近な環境教育の対象として注目されるようになった。また、子どもたちがこれからの環境保全を考えていくことの必要性が強く求められているということもある。本報は大淀川で、平成17年度に実施した自然体験活動の結果を整理したものである。

2. 本自然体験活動の目的

河川環境教育は、人と河川環境との関わりについて理解を深め、責任ある行動がとれるようにすることを主な目的として、そしてひいては円滑な河川事業の推進のための啓発活動や、良好な河川環境の保全・創出活動を目的として行われている¹⁾。

最近の子どもたちは、テレビゲームや大規模な河川改修などにより、私たちの身近にあり、自然、生命の大切さを学ぶ場である川に触れる機会が減少し、水遊びなどをする子どもたちの姿が見えなくなっている。平成10年に文部省が約11000人の小中学生を対象に実施した「子ども体験活動に関する調査」の結果では、自然体験をしたこのある子どもは、道徳観や正義感があるという結果が出ている²⁾。このように、子どもの頃の自然体験は重要であるから、川で自然を体験してもらうために子どもたちに川に関する知識や、川の大切さ、おもしろさを学ぶ機会を与えたいと考えている。また、子どもたちをイベントなどで川に呼び込むことで、川は危険と教えられてきた大人たちにも子どもたちと一緒に、川のすばらしさを体験してほしいと考えて、川での自然体験活動を実施した。

3. 本自然体験活動の内容

活動実施場所は、宮崎県都城市にある川の駅公園という多目的活動のできる場所で、がぐれんす子ども教室と称して、毎週土曜日に計48回行った。川での自然体験活動の指導者の管理の下、川の流れの性質、安全な遊び方、川遊び、川での文化・歴史などを体験することで、面白さを実感してもらうこととした。内容は、主に川原で遊べるものを中心に表1に示すカリキュラムを実施した。

表1. カリキュラムの内容

川の安全について	ネイチャーゲーム	池で遊ぶ	川遊び
自然観察	水のオリンピック	灯籠づくり	紙すき体験
水鉄砲づくり	水生生物調査	七夕づくり	水の歴史
カヌー教室	水質調査	川流れ	石の工作
凧づくり	かまどでご飯づくり	環境まつり	草スキー
リース作り	工作	風景画	昔の遊び

4. 実施の結果

カリキュラムの内容で参加者数が多かったものなどを図1に示している。これらの結果を整理すると、カヌー教室、川流れ、川遊びなど川に入る活動的な体験に人気があり、室内で遊ぶよりも外で遊ぶ内容を選ぶ傾向にある。本活動の最多の参加数は10月に開催したカヌー教室で39人集まり、平均参加人数は約18人であった。

参加した子どもの多くは実施場所である川の駅公園近くの地域に住んでいる小学生3年生から5年生が中心であり、幼稚園児といった小さな子どもは、親と一緒に参加してもった。カヌーを体験するために他の市から参加してくる家族もいたことから、このような体験をする機会が少ないことが分かる。

キーワード 環境問題 河川環境教育 自然体験 環境保全 がぐれんす子ども教室

連絡先 〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地 tel 0985-58-7338 fax 58-7344

普段、プールで泳ぐことはあっても、川で泳ぐことの少ない子どもたちが、自然や川の流れを直に感じる事ができて、良い体験になったと考えられる。しかし、カリキュラムの内容によっては、小さな子どもには難しいものが含まれていたもので、参加できるように変える必要がある。

参加した保護者からは、「参加してから子どもが話している人の目を見るようになり、よく話すようになった。」と語る親がいたことから、子どもが少しではあるが変化しているように感じた。また、「楽しかった、面白かった、またやりたい」などと、子どもが喜んでいる意見が多く出たことから、この活動が少なからず子どもや親のニーズと一致していることが分かる。

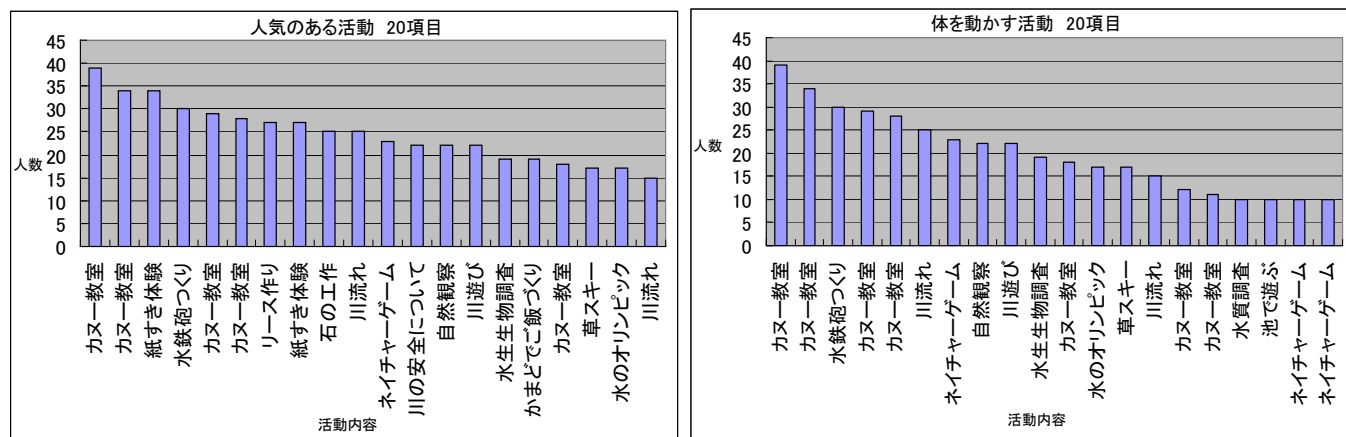


図 1. 活動内容における参加人数

5. 九州内での活動状況

現在、たくさんの団体が河川と子どもをつなげる活動をおこなっている。例えば、河川環境保全の意識を高める河川敷のゴミ清掃、リバーチャレンジスクールと題して、風揚げや野草を摘む活動や汚染物質が川に与える影響を調べる活動、住民が参加して川のことを考えるシンポジウム、魚釣り、バードウォッチング、カヌー散策を行うリバーツーリズムなど³⁾がある。また最近では、小学校が総合学習の一環として、水生昆虫を調べたり、川と自分の住む地域との関わりを調べたりと、川を学習に利用している。

また、活動を行う上で、団体同士のつながりだけでなく、商工会や観光協会、市町村などとうまく連携している所がみられる。これからは個人や一つの団体といった小さなグループではなく、それらを含めた多方面での交流が必要になる。

6. 今後の課題

今後の課題として以下のことがあげられる。

- ①参加数が少なかったが、地域に住んでいる多くの子どもたちが参加していくように広報する必要がある。
- ②子どもは集中力が持続しないので、刃物を使用する機会が多い時は、大人がよく注視する必要がある。
- ③川遊びや川流れなどで川に入る時は、安全性の確保が重要であり、より多くの指導者の確保が必要になるので、ボランティアの募集や川の指導者の人材育成、他団体と連携することで支援し合う体制を作る必要がある。
- ④最近、子どもを狙った犯罪が目立つ為、安全監視員といった人間を配置し、子どもの安全を守る必要がある。

参考文献

- 1) 平成 16 年 4 月 文部科学省 生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室
- 2) 平成 17 年 12 月 河川環境総合研究所報告第 11 号 p 79—p 87 p 89—p 97
- 3) 九州川の情報室ホームページ : <http://www.kawa-guide.jp/>